武内善信著

『雑賀一向一揆と紀伊真宗』

弓倉弘年

本書は著者のライフワークとも言える雑賀衆と浄土真宗との関係を基軸に、戦国・織豊期の紀伊の様相を明らかにしたものである。以下、本書の内容を概観するため、目次から各部・各章を抜粋してみたい。

まえがき―本書の課題と構成―
第Ⅰ部　戦国・織豊期の紀伊真宗
第一章　紀伊真宗の開教と展開
補論1　蓮如筆「紀伊国紀行」の検討
第二章　真宗教団と被差別民
補論2　「被差別部落一向一揆起源説」の実証的検討
第三章　雑賀における御坊の成立と変遷
補論3　戦国期の鷺森寺内と宇治
第Ⅱ部　雑賀衆と雑賀一向衆
第四章　雑賀一向衆の実態
第五章　雑賀衆と雑賀一向衆
補論4　戦国期における雑賀五組の境界
第Ⅲ部　「石山合戦」と雑賀一向一揆
第六章　天正三年の雑賀年寄衆関係史料
第七章　天正六年の雑賀志衆関係史料
第八章　雑賀衆と「石山合戦」
補論5　秀吉の朝鮮侵略における降倭部将沙也可と「雑賀孫市」

次に本書の内容を簡単に紹介したい。「まえがき」は、著者が理解した室町・戦国期の紀伊の歴史と、関心のある事柄について述べるとともに、本書の構成について記している。

第Ⅰ部は、室町・戦国期の紀伊における浄土真宗の発展に関する論考で構成されている。

第一章では、南北朝期の仏光寺教団における開教から、文明年間の蓮如による紀伊開教について、清水道場に下付された二尊像の年代とともに、諸説を比較し論証している。第二章では、被差別民と浄土真宗との関係について述べている。以前、井上鋭夫氏が提唱した「ワタリ・タイシ」論が成立しないことを論証している。また、補論2では、「被差別部落一向一揆起源説」が成り立たないことを論じている。第三章では、紀伊における浄土真宗の拠点が、清水から黒江・御坊山・鷺森へと移転した経緯を論じるとともに、「御坊」の成立について論じている。

第Ⅱ部は、雑賀衆と雑賀一向衆に関する論考で構成されている。第四章では、西本願寺が所蔵する「雑賀一向衆列名史料」が、石山合戦講和に関する史料であることを証明した。第五章では、第四章の結果をもとに、地縁的結合である雑賀衆（雑賀五組）とは別に、本願寺の下にある雑賀一向衆が存在したことを論証した。そして紀伊の「惣国」は雑賀五組であることを論証した。

第Ⅲ部は、「石山合戦」と雑賀一向一揆に関する論考で構成されている。第六章では、天正三年（一五七五）の雑賀年寄衆の関係史料を通して、石山合戦と雑賀一向衆の関係について述べている。第七章では、天正六年（一五七八）の雑賀志衆の関係史料から、石山合戦期の本願寺の門徒統制について論じている。第八章では、石山合戦と雑賀衆の関わりに関して述べている。補論5では、豊臣秀吉の朝鮮出兵時の降倭部将沙也可と雑賀孫市が関係ないことを論証している。

以下、評者の関心によって記していくことをお断りしておく。本書は紀伊と本願寺の関係、雑賀衆と雑賀五組、雑賀一向衆の関係を軸に論を進めており、地域史研究を命題としている。たとえば、降倭部将沙也可がいわゆる雑賀孫市ではないことを正面から論証している。このような学問的に成り立たないことも、あえて取り上げて証明する謙虚な姿勢は、評者も見習わなければならないと猛省する次第である。なお、沙也可が雑賀孫市と同一人物だと一般に言われる契機となったのは、平成の初め、評者が和歌山県史編纂班に勤めていた時に、全国ネットで放送された歴史番組である。

本書で論証されたことは、地域史にとどまらず、一向一揆研究、惣国研究に大きな成果を上げたと評者は考えている。たとえば、地縁的結合である雑賀五組と、天正年間の石山合戦に本願寺方の主力として活動した雑賀一向衆の結合原理が別物であることを論証したが、これは雑賀衆のみならず、一向一揆と本願寺の関係を論じるうえできわめて重要な事柄である。しかし、雑賀の地域史の観点から論じているため、かつて鈴木良一氏・笠原一夫氏らが提起した一向一揆をめぐる問題に触れていないことが残念である。

本書において論証されたことは、中世史研究において、重要なことが多く存在する。本書は雑賀衆と紀伊真宗といった地域史にとどまらず、一向一揆とは何かを論じるときに必ず取り上げなければならない研究書の一つであると言えよう。広く歴史研究者に熟読されることを希望する次第である。

（ゆみくら・ひろとし　和歌山県立桐蔭高等学校教諭）

（A5判、四〇八ページ、九九〇〇円、法藏館、二〇一八・一〇刊）